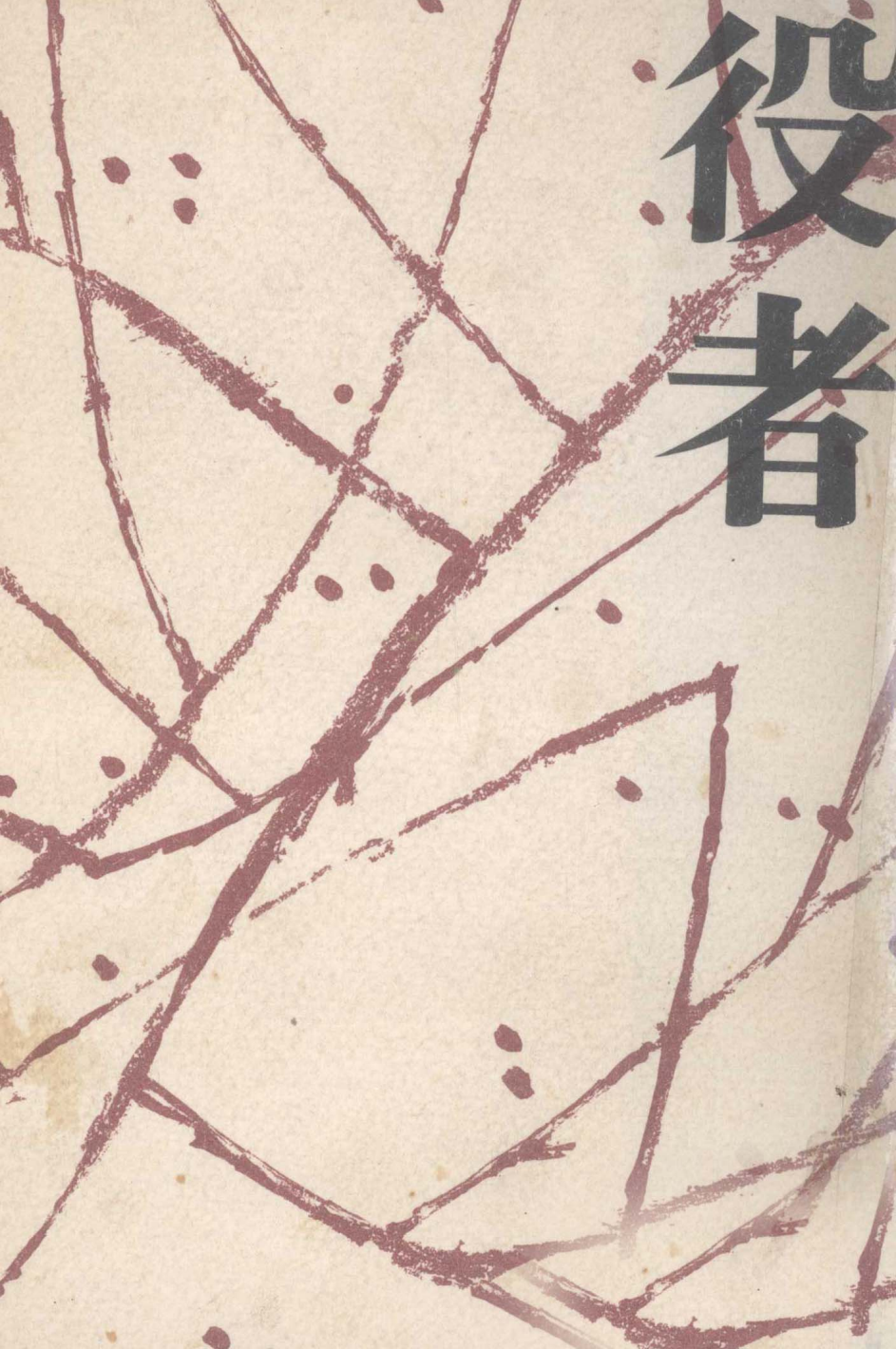


役者





川口松太郎

役者

—小説 花柳章太郎—

新潮社版



Printed in Japan

役者 定価三四〇円

昭和四十一年一月十五日印刷
昭和四十一年一月二十日発行

著者 川口松太郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七番電話
東京(四)二二二 振替東京六〇

印刷 二光印刷株式会社
製本 新宿加藤製本所

△落丁本はお取替えいたします

役

者

信吉は明治三十二年生れの亥年だが、花柳は二十七年生れの午年だから、五歳も上なのに、年長の友達に思えなかったのは、作家と役者の仕事の違いが、そんな風に感じさせたのかも知れない。

「役者馬鹿」という言葉は花柳の為に作られたのではないかと思えるほど、何処か間が抜けているくせに、忪はきっちりしまっている。

喧嘩もずい分したし、喧嘩のあとは抱き合って泣くような子供っぽさもあって、そんな時は花柳の方が弟みたいに意気地がなかった。

大変ものの判りのいいところと、まるつきり判らないところと、二つの面を抱き合せて持つていて、そのちぐはぐのアンバランスも「役者馬鹿」に当てはまって、間違っているような正しいような、何かしらトボけていて愛嬌がある。

花柳の周囲は、彼の愛嬌に幻惑されて喜んでいようだったが、信吉は出来るだけ冷たく見て、まどわされまいとした。

その冷たさがカンにさわるらしく喧嘩が始まり、

「俺ア馬鹿だよ、馬鹿は初めっから判ってるんだから厭なら付き合わなきゃいいじゃないか」と、来る。自分を馬鹿と決め「馬鹿はいいが薄情はいけない」という、泉鏡花哲学を腹の底へしみ込ませ、あたたかい馬鹿を理想像にしている。

「馬鹿はいいが無知はいけないよ」

信吉はそのたびにいった。

「俺が無知だというのか」

「ときどき無知になることがある。無知に軽率が加わるから始末に悪い」

「何だっけそう冷たくいうんだ。もっと親切に教えたらいいじゃないか」

「教えるほどこっちも利口じゃないよ」

「そんなら文句いうな。ケチだけつけて教えねえのは意地が悪いってもんだぞ」

「俺は批判型だから、お前のする事が間違っていると腹が立つ。そんならどうするかと聞かれたっても教える力はない」

「そんな不親切な友達があるか。判らねえのなら黙っててくれ」

「よし黙ってる。金輪際黙ってる」

おおむねこんな喧嘩だ。初めは君で、お終いはお前になり、初めは僕で最後は俺になるのが、口癖だ。

「俺は結婚したいんだが、お前は又、反対するだろうな」

そういったのは大正十四年の秋、とつくに三十を過ぎてしまったのにまだ独身で、結婚の必要がないほど、多数の女性がいた。

「反対どころか賛成だ。これ以上一人で置いたら、生活の乱れは收拾し切れなくなる」

と、即座に賛成し、生活の乱れを調整させるためには結婚より外はないと思った。花柳には父がなく、母は下谷で芸者屋をしていて、人気役者になった彼の身辺も他人任せだ。

大正十二年の、関東震災に焼け出されて大阪へ来て、道頓堀の角座に、新進新派の看板をあげ、堀の人気を一人占めにして、梅島昇や藤村秀夫たちを亭主役者に、舞台姿の美しい盛り、瀬戸英一の「人来鳥」や「金色夜叉」や「舞鶴心中」等が大ヒットして、人気絶頂の結婚ばなしだ。

彼は信吉が反対すると思い、初めは打ちあけなかったが、賛成だと聞くと意外らしい顔で、
「相手を知ってるのか」

「だから君は馬鹿だというんだよ」

信吉は腹を立てた。殆ど毎晩一緒にいるのに、意中の人の判らぬ筈はなく、

「里寿に決ってるじゃないか」

「やっぱりばれたか」

「賛成するのも相手が里寿だからだ。君にはああいう従順な女がいい。強つ氣で鼻っ柱の強い女だったら持ちっこない。あれは女房に打つてつけの人だ」

「いやに褒めるな。悪口ばかりいつてる癖に、内心惚れてたんじゃないのか」

「惚れてたつていいじゃないか。君のフィアンセと決れば問題は別になる。今日からは花柳夫入として尊敬するよ」

「結婚して今の人気の落ちるようなことはないだろうか」

花柳は真剣な目をした。

そんな事にまで気を遣わねばならない時世でもあった。

道頓堀の劇場は、花柳界とつながる組組織くみそくしきがあり、芸者屋町の後援者を持たぬ役者は一流といわれず、南地でも曾根崎でも新町でも堀江でも、花柳の組見は無数にあった。若くって綺麗で腕が立つて、新派の将来を背負って立つ女形、条件は申し分なくとのっているが、どの条件をも越える武器は独身だ。四遊廓の何処の土地にも愛人芸妓がいて、それぞれに妻の王座を狙っているが、それらの競争者を退けて選ばれたのは南地の里寿、宗右衛門町切つてのはやりつ妓で、姿がよく顔立ちが美しく、大阪中でも指折りの名妓で、花柳が里寿に打ち込んでいることは誰知らぬ者もなく、知れまいと思つてゐるのは花柳だけだ。口数の少ないおとなしい妓で、座敷で会つても静かに坐つていて、美貌を鼻にかけるようなところもなく、人を見る目に

あたたか味があつて、花柳の妻には理想的な相手だ。

「君が賛成してくれたんでやや落着いたが、東京のおふくろは反対なんだ」

「反対するくらいなら大阪へ出て来て身の囲りを見ればいいじゃないか。何もせずに放つといて、反対もヘチマもないよ」

「いやそりゃだめだ。俺のおふくろは、遠くにいて時時会えばいい人だが、毎日一緒にいられたらこっちがくたびれる」

「おふくろに反対されたら止める気か」

「馬鹿いえ。おふくろを納得させたいから苦勞するんだ。それには時間がかかるし、暫くは恋人同士でいる」

花柳の母親は一風変つた東京っ子で、花柳がこれほどの人気者になつていながら側へも寄らず、伴を食いものにするようなさ、し、さはなく、大阪という土地柄も虫が好かず、

「何だつて上方贅六を女房にしなけりやならない。東京に女はいないのか」

と、いうのが母の怒りだ。いくら怒つても東京と大阪では対岸の火事、間もなく花柳は天下茶屋の住居を引き払い、炭屋町の里寿の屋形で同棲生活を始めた。

心斎橋通りの煙管屋の路地を入つた小さな家で、その二階へ、まるで入聲のように入り込んで、そこから角座へ通い出したが、反対の筆頭は番頭の山田だ。立派な家があるのに、何を好

んであんなところへ行くのか、人に訊かれても恥ずかしいと、真向うから反対したが、花柳は耳にも入れない。

山田が反対の理由の一つには里寿の母親、土肥とめという女性があった。南地三婆あの一といわれるしつかり者で、娘を芸妓にして売り出すほだだけに気性も荒く負けず嫌いで、娘の部屋へ転がり込む男を、黙って見ているような女ではない。相手が花柳章太郎なればこそ、聲としても立派だし、我が家の二階に住まわせても恥にはならない。おとめは花柳を聲にとったつもりでいるから、古い番頭の山田は気になって堪らず、岡焼き半分の世間もよくはいわず、悪い噂はとめどなくひろがる。

世評を気にして信吉も訪ねて行かなかったが、お座敷で偶然、里寿に会った。何にもいわず悲しそうな顔をし、噂に気を兼ねているのが可哀そうになって、翌日、炭屋町を訪ねて行った。

芸妓屋形の見本のような家で、問題の土肥とめも噂通りの人柄だった。でっぷりと肥った赤ら顔で、台輪の火鉢の前にでんと坐って、南地三婆あの名称にふさわしい貫禄、只者ではないと思わせるアクの強さが堂堂としている。

花柳と里寿の結婚は、新聞にも出されて大阪中へ広まり、花柳の最良は例外なく反対している。

反対の理由も例外なく土肥とめにある。

東京の母の嚴重な反対も、おとめの噂が伝わったからだ。伝えたのは番頭の山田で、

「先生はまるで里寿のうちへ掣に行つたようなもんですが、それでも好いんですか」

と、母や姉をけしかけ、結婚話を壊そうとした。反対が激しくなるにつれて花柳もしょんぼりして、挙式を急がなくなり、里寿もまだ芸者をやめてはいなかったし、角座の舞台のすむ頃に、座敷から歸つて来れば、結婚せずとも、夫婦同様だ。

おとめの方も出来るだけ長く芸者で働かせるつもりだから、別に急がず、正式挙式を引きのばして時を稼ぎ、非難の消える日を待とうとした。

「反対が多すぎるようだな」

と、信吉が心配すると、

「そうなんだ。反対者の多すぎるのに驚いてるんだ」

「理由は里寿当人でなく、おふくろさんらしいぞ」

「世間はおふくろを知らないんだよ。一癖ありげな顔しているのと、思つた事をずばずばいい過ぎるので、誤解されやすいが、根は善人なんだ」

と、しきりに弁護する。世評はうわべの印象だけで、実際には好人物だと主張する。

「そんな事は問題じゃない。他人が何をいおうと、君とお勝ちゃんの愛情が強ければそれまで

だ」

里寿の本名は勝子といい、信吉も本名を呼んでいた。

「然し、真剣に愛するのなら、他の女たちを整理しなければいけないだろう」

「むろんだ。今だって他の女には会っていない」

「嘘つけ。俺は昨日曾根崎で秀春に会ったぞ。あいつ白状している」

「お前はまるでスパイみたいな奴だな。どうして俺のことをそんなに気にするんだ」

「自然と耳に入るんだよ。秀春だって妬いてるんだ」

「正直なところ秀春には弱ってるよ」

「あいつにもうまいこといってあったんだろう」

「いやそんな事はない。遊びはしても、女房にしようと思った女はお勝だけだ」

「当人はそういつてるぞ。兄さんのお嫁さんにして貰うつもりだったって」

「あいつが勝手にそう思ってるだけで、そんな約束した覚えはない」

「そこが君の弱さで、女の方から泣きつかれると、その場だけでもうまいことをいってしまう。俺が何時も心配するのはそれだ。その場の空気に負けて、心にもないことという癖は昔からある」

「判ってる判ってる」

花柳は直ぐベソをかく。

やりこめられてベソをかくと、よく晴れたお月さまに霞のかかったような風情がある。

花柳の舞台顔は、華やかで美しくて憂いがきき、立女形の素質満点で、ベソをかいてうなだれる顔は、抱きしめてやりたいほど美しい。

秀春は曾根崎新地の若手のぱりぱりで、花柳に熱をあげていた女の一人だ。堀江にも新町にも相手はいたし、京都の祇園町にも、神戸の花隈にも彼にふさわしい愛人がいて、里寿の噂が伝わると、涙ぐんだり怒ったりしていた。

然しそれも初めのうちだけで、花柳の決心の固いのが判るにつれ、反対派もだんだんに折れ、里寿も芸妓をやめ、周防町に小広い家を借りてその方へ引越した。山田の反対も主人思いの末だから、花柳の氣持が変らなければ諦めるより仕方がなく、周防町の新居は、花柳章太郎と土肥とめと二枚の表札で、公然たる結婚表示だ。

花柳の表札がかかれば信吉も大手を振って遊びに行き、おふくろとも話し合うようになったが、近づいて見れば噂ほどの事もなく、案外に気のいい小母さんで、花柳の友達が来ると喜んで迎え、自分から勝手へ立ち、酒や肴の支度をしてくれるような人だ。女中たちにいいつけよりは、自分でやった方が早く片づくといった風の、口も八丁手も八丁、他人のやることもどかしく、何事にも先立ちになつてやり、間違いがあれば容赦なくびしびし叱る。遠くから見

ていると、一癖ありそうだが、近寄って見ると人がよくて、親切で、やさしく、話も面白い。初めのうちは毛嫌いしていたが、終いには仲好くなり、花柳が留守でも上り込んで、茶呑み話までするようになった。

「そんなに悪い人間じゃないだろう世間でいうような」

と、花柳は救いを求めるような目をした。

「案外善人だが、誤解されやすい性癖もあるな」

「そりゃア仕方がない。誰だって一癖あるんだから」

「結婚後もおふくろと一緒に住むのか」

「住む。勝子によって生きている人だから、引きはなすワケにはいかない」

「下谷のおふくろにしたら、そこが不服だろう。一人息子を他人に取られたような気がして」

「大丈夫だ。そんな事を愚図愚図いう人じゃないんだから」

そうはいったが東京の母は、最後まで反対して了解しなかった。

里寿が芸妓をやめてしまうと、世間の非難も自然に消え、大正十四年の押しつまった十二月に、高麗橋の大阪ホテルで披露宴を開いた。媒酌人は師匠の喜多村緑郎夫妻。

同棲後半年以上もたっているのに、新婚の初初しさはなく、花嫁も花婿もむしろ洋食を食べ、花柳らしい冗談をとぼし、賑やかな披露宴だった。

東京の母も姉も諦めて参加したが、食事が始まるとボーイの一人が、大きな寿司の皿を高くとささげて花柳の母の前へ持つて行った。明治風の一刻^{いっせき}さで洋食を口にせず、頑固一徹の寿司の皿だが、土肥とめは洋食のコースをちゃんと食べていた。

年配もほぼ同じくらい、気の強さもよく似て居り、一方は東京人の負けん気と、一方は関西人のねばり強さと、二人の母親の対決は見ものだった。

花柳の母は不快な顔を露骨にしてとめを睨みつけ、とめは知らんぷりで相手にせず、どっしりと腰を据えて落着き払っている。東京の母が結婚を嫌っていることも判っているだけに、土肥の母の心中も面白からず、

「里寿のおふくろに章太郎を取られてしまった」

と、東京母は平然と口に出した。

結婚後も花柳が髻のように、土肥家の家族と同居して、花柳の親とは縁の切れたような形だ。

披露宴がすむと花柳は、花嫁を置き去りにして、久保田万太郎や仲人の喜多村や信吉たちを誘い出し、新町の中京という茶屋へ行き、花髻姿のまま、夜更けまで酔っぱらってはしゃいで、一時すぎから周防町へ帰って、

「結婚式の晩に芸者遊びをした髻さんは俺一人だろう」

と、威張った。

間もなく里寿の勝子は、美しい丸髻姿で芝居へ来た。組見のお客に礼をいったりして、役者の女房らしく働き出したが、温順な性格はどの最真にも愛され、結婚は成功したようだが、母のおとめには疑いが残され、

「いい嫁はんだがおふくろが嫌いや」

と、いう者が多かった。誤解されやすい人柄で疑われる理由も十分だ。

「勝子はんはおとなしいよって、おふくろさんと章ちゃんの中へ入って苦勞することやろ」

と、いう評判だったが、周防町の生活も噂通り、土肥とめの気の強さが、花柳を圧迫する事多く、中に立つ勝子の苦勞は、信吉の目にも見えるようになった。

母思いの勝子は、母へ半分、亭主へ半分といった具合の気の使い方、結婚の初めから新婚らしい甘さがうすく、おとめの目の光る中の夫婦だった。

「何もあんなお荷物つきの嫁さんを貰わなくなつていいのに、うちの先生はあれで苦勞しますよ」

と、番頭の山田はまだ不服だ。不服の底には芝居の不振も原因していて、花柳、梅島の新進新派も、一頃ほどの人氣が湧かず、二年間ぶつ通した角座は、脚本の後続がなく、入りもがったりと落ち、梅島はさっさと東京へ歸ってしまった。